

学位論文の概要

チーム・ティーチングによるコミュニケーショングラマーの教え方

専攻名 英語教育専攻 氏名 正元 明博

1987年から語学指導等を行う外国青年招致事業 (Japan Exchange Teaching Program) が始まり、年々参加者が増え、2002年度には38カ国6,273名が参加するようになった。それに伴い、外国人講師 (Assistant Language Teacher, 以下, ALT) と日本人英語教師 (Japanese Teacher of English, 以下, JTE) によるチーム・ティーチング (Team-Teaching, 以下, TT) の規模も拡大してきている。

生徒の実践的なコミュニケーション能力を養うためのTTだが、問題点も少なくはない。本研究でとりあげたのがその中の一つ、「発話の正確さ」である。従来のTTではコミュニケーション活動に重点を置き過ぎるため、授業の中で、明示的な文法説明をほとんど行わず、そのため生徒の発話は「流暢」ではあるが、「正確さ」に欠ける傾向があることを考慮し、本研究では、JTEによる文法の明示的説明とALTによる文法項目を意識させたコミュニケーション活動を一つのTTの授業の中に取り入れ、生徒の流暢、且つ正確な発話を促す授業を模索してみた。

TTで取り上げる文法項目として選んだのは、仮定法で、その機能は「丁寧な依頼」と「事実に反する事柄を表す」である。仮定法を選んだ理由は、実際のコミュニケーションの場面で、かなり頻繁に用いられ、話者の心的態度を正確に伝えるには欠かせない項目だからである。例えば、Would you ~ ? や Could you ~ ? などの表現は従来のTTにおいては「丁寧な依頼」として提示されるだけ

で、仮定法であるという明示的な説明がなされていなかったり、もう一つの「事実に反する事柄を表す」機能と共に提示されていなかったということもよくあった。このことを踏まえ、本研究では、学習者が流暢且つ、より文法的に正確な文を発話するためには、学習者の意識を文法に向けさせる必要があることを考慮し、TTの中にJTEの明示的な文法説明を取り入れた。つまり、英語では助動詞の過去形を用いると「丁寧な依頼」を表現することができ、またIf節の中で、動詞の過去形を使うと「事実に反する事柄」を表現することができることをJTEが明示的に説明した。さらに、コミュニケーション活動でも、生徒が用いている表現が、文法項目の仮定法であるということ意識させた上で行った。

以上のような授業に、効果があるのかを調査するため、二つのテストを実施した。正確さを測定するために文法項目テストを、流暢さをみるためにInterview Testを行った。文法項目テストでは実験群と統制群には、統計的有意差が見られた。また、ALTによるInterview Testでは実験群の生徒の方が高得点を得た。

以上のように、本研究は、チーム・ティーチングにおいて、生徒が文法項目を意識したコミュニケーション活動を行い、TTの中に明示的な文法項目の説明を取り入れることが、生徒の流暢且つ正確な発話を促し、真の実践的コミュニケーション能力を養成するには有効であるということを示唆している。

Team-Teaching とコミュニケーション

Team-Teaching のシラバスは主に学習者の会話能力を高めるための

従来のチームティーチングではコミュニケーションに重点を置きすぎたため、文法的に正確な文を学習者が

文法の明示的指導が必要である。そこで本研究ではコミュニケーション活動と文法の明示的説明。

本研究では仮定法に焦点をあてた。

コミュニケーション活動と明示的な文法説明で、学習者の流暢且つ正確な発話を促す。

A L T と J T E

学習者の会話能力を高めるために Native Speaker of English との共同授業。

流暢さと正確さを求める授業が必要である。